

「いえ、僕にとつてはすぐありがたい話ではあるんですけど、だけど」

押しつけがましいだろうかと、少し不安になって迷惑かと聞けば帝人は横に首を振る。

どうやら彼はひたすら静雄に対して遠慮し、申し訳ないと思っているらしい。そう思う必要性など、少しもないのに。

「ありがてえって言うなら、そのまま領いとけ」

言いつつ、そして気づく。自分の帰宅時間はかなりバラバラだ。

何しろ回収相手次第なのだから。今日の時間に終業するのはかなりラッキーな場合で、つまり数少ない。

帝人は部活もやつてないと聞いていたので、夕方には時間が空いてしまうだろう。そうなると、自分が帰宅してから夕飯を作る、もしくは買ってきたものを一緒に食べるとなると、かなり帝人を待たせることになるし、当然さらに帰宅が遅い時間帯となってしまう。

一人暮らしだから門限はないだろうが、それでも高校生にあまり夜遅い時間帯を歩かせるわけにはいかない。

「あの、それなら、もし迷惑じゃないなら、僕が夕飯、作りましょうか？」

静雄の考えていることがわかったわけでもないのだろうが、絶好のタイミングで帝人がそう告げる。

「その、材料費はお借りする形になりますけど、給料日がきたら返します。一人分より二人分の方が経済的ですし」

「お前、料理作れんのか？」

「難しいのは無理ですけど、簡単なものなら。僕の方が時間はありますし」

言つて、にこり、と帝人は笑み浮かべる。

「良いのか？」

「もしそうさせてくれるなら、その方が僕もありがたいです」

食事を作ってもらつて食べるだけ、という立場はありがたくて楽だが、どうにも申し訳ない、と帝人は言う。借りを作りすぎる気分になるらしい。

それに静雄が考えたとおり、時間的な都合もある。帝人は学校が終われば基本、それなりに時間がある、とのことだった。

結局、話し合った結果、食費は静雄が全額出して帝人が夕食を作る、ということで話はまとまった。

最初、帝人は食費を返す、とねばつたが、どうせ外食すればそれなりの料金になる。その金額で二人分の食事代に成り得るかと問えば、十分です、という自信満々の返答が返ってきた。もしかして白米の他はモヤシ炒めだけが出てくるのかも危惧したが、さすがにその心配はないらしい。そうなれば、静雄にとつては金銭的負担はないに等しい。出金金額は今までと変わらないのだから。なので気にするな、と笑つて言ふと、帝人は困った顔をして、渋々頷く。

「静雄さんは優しいですね」

「んなことねえ」